

フッサール現象学における実在性

―物・身体・心

鈴木康文

序

フッサールは、現象学の体系を著すべく一九一〇年代に『純粹現象学と現象学的哲学のための諸構想』（以降『イデー』と略記）全三巻を構想したが、上梓されたのは第一巻のみであった。第二巻以降は生前出版されることなく、草稿として残り、第二次世界大戦後フッサール著作集の出版のなかで、初めて公にされた。

本稿は、このイデーン期において、フッサールは身体と心の関わりをどのように捉えていたのかを考察したい。これはいわゆる心身問題に該当するのであるが、フッサール自身はこの問題に直接答えることはしているわけではない。

フッサールの記述（『イデーンⅡ』の前半）は、経験科学を遂行する理論的態度である自然主義的態度のもとで、質料的自然（物）、動物的自然（身体、および心的実在）という階層の枠組みを基に議論を進めている。そしてその中で自然主義的態度を現象学的に分析し、諸領域の構成が論議される。それゆえ、

この枠組み内で、心と身体（および物）の構成を捉えているので、直接心身問題の分析と重なるわけではないこととなる。

むしろ本稿は、フッサールの論述に従って、実在としての物、身体、心がいかに構成されたのかを考察し、そこからそもそもいわゆる心身問題がいかに生じてきたのかを考察する手がかりを得る。本稿においては、特に身体が何らかの物に触れている、という事象から、物、身体、および心がいかに構成されるのかを辿り、その上で身体と心との連関を導出することを試みる。

本稿はそのため実在性を簡単に規定した上で、物の実在性を素描する（第一章）。次に第二の実在である身体の構成を取り上げる（第二章）。ただし身体構成については、フッサールは二つの異なる仕方でも論議しているので、それぞれを取り上げて、その違いを明示し異なる解釈を導き出す。またこの章ではそれを踏まえて、フッサール研究者でも解釈が分かれている「感覺態」概念を分析し、フッサール自身が抱えていると思われる揺らぎを指摘する。

次の章では、身体構成の論議を深めるために、フッサール自

身が、身体構成に関してあるアポリアが生じると述べている箇所があるので、その問題を考察し、それが疑似問題であることを示してみたい(第三章)。「最後に実在としての心の本質規定とその構成を記述して、心と身体との関わりに関して論を深めることとする(第四章)」。

なお本稿はフッサールに倣い、自然主義的態度のもとでの質料的自然(物)、動物的自然(身体、および心的実在)という階層を基に議論をする。しかしこの枠組みおよび階層をもたらしただ自然主義的態度の制約を明らかにすることが、本稿の課題でもあるので、あくまでも身体がある物に触つているという事象を中心に議論を進め、一旦は(物、身体、心といった)階層性からは離れてみることにする。

第一章 実在の規定

フッサールは『イデーⅢ』の冒頭において、『イデーⅡ』までの論述を振り返りながら、今後の分析を方向付けしている。それによれば、『イデーⅡ』においては、質料的な物、身体、心(もしくは心的な自我)の三領域の区別を確認した上で、その現象学的源泉を辿った(H.V.1)。これは経験される実在性を直観に基づいて分節化したものであり、すべての思考や学に先行するものである。(この領域区分は、ある意味日常的な直観に基づいているが、ただしその領域がいかに構成されるかを巡って、『イデーⅡ』は自然主義的態度と人格主義的態度の

二つの態度から論議を繰り広げている。)

『イデーⅢ』においては、この領域の区分にもとづいて学の発現を探究することが目的とされる。本章ではこの分節化の成立を『イデーⅡ』をふくめて改めて確認する作業から入ることにする。

この三領域であるがフッサールはある一つの感覚を出発点として、その領域の構成を記述している(H.V.11f)。

たとえば身体が衣服に触れていることを感覚しているという事象を考察してみよう。その場合、まずその感覚は、衣服を呈示している内容であり、同じことだが、それを介して衣服という質料的物を統握している。次に同じ感覚は局所づけられ、触っている身体自身を現出させている。さらにはその同じ感覚は、自我が知覚しているという状態において、「心的なものの構成要素」となり、心のなかに帰属することとなる。つまり一つの感覚が物構成、身体構成、心の構成と三重に機能しているわけである。本稿はこの事象を下にして、フッサールの身体と、心の関わりを論述を再構成する試みである。なおあらかじめ注意すべきこととして、この事象分析は、物の実在を基盤として、その上で身体の実在、さらには心の実在の構成という階層化は前提としていないことである。

さて第一に述べられた物の規定とその統握であるが、質料的な経験のなかで、我々は自然を構成している。自然は、「時空間と因果連関」において経験される。「質料的な自然は、なにか完全に閉じたひとまとまりのものとして存立」(H.V.3)し

ている。もちろん学の対象としての自然の客観性は、相互主観性にもとづいており、その意味では自然は身体や自我に連関しているが、しかしそれは「自然の自立性」とは別の問題である。

フッサールはすべての実在は、因果関係による説明のもとに学がなされたと規定している (H.V.3)。これは狭義の自然ばかりではなく、それ以外の実在すべてにおよぶものとして考えられている。(ただし、フッサールはここで説明的な学と記述的な学の区分はしており、実在に関する学は、説明的な学に位置づけられている。また、心に関する学も後に一定の留保がつけられている。)

この物認識にかんしては本稿では、簡単に触れるにとどめ、実在としての身体および心に関して、章をあらためて述べることにする。

あらかじめ留意すべきことであるが、フッサールは単に実在を実在として規定したり、実在相互の関わりを論議しているのではなく、現象学にもとづいてあくまでも実在は構成された内容としてのノエマとして述べている。態度問題から述べるなら、自然主義的態度を自然主義的態度のもとで考察しているのではなく、あくまでも現象学的態度のもとでの分析を推考しているといえよう。

第二章 実在としての身体 (の構成)

次に実在としての身体の領域に話を進めよう。『イデーンⅢ』

においてフッサールは身体構成に関して、明確にはしていないものの実は二通りの解釈を示していると思われる。その枠組みを指摘した上で身体構成の論述をしめしたい。

ひとつは、あくまでも身体が固有の実在であることを強調し、自然(物)の実在とは別の領域であることを導くものである。他の一つは、なるほど身体の固有性をいうものの、それがあくまでも自然という実在を基盤とした上での実在であることを述べるわけである(こちらは特に自然主義的態度の学のあり方のもとで述べられることとなる)。

(a) 物に接触した事象

まず第一の方向付けを記述してみることにする。

これは先の身体が衣服に触れている接触現象から導くことができる。物に触れているなかで、身体に特有な層 (Schicht) が構成される (H.V.5)。この層は物の質料的な規定とは根本的に異なった本質であり、その物との対比と、また「構成される」あるいは「統握される」という表現から、実在の一つを意味し、本質規定された内容(すなわちノエマ)といえる。そしてこの身体固有の層に帰属しているのが「実在的に統一的な種々の感覚領野」である。それゆえ感覚領野には、接触による感覚やさらには作用、さらには感覚によつて呈示される内容が含有していることとなる。そしてその感覚領野に実在の構成において「局所付け」(Lokalisation) が直観的に示される³⁴⁾。つまり何らかの接触において、単に感覚が体験されるだけでなく、身体自

身の感覚が局所付けられ、身体固有の構成がなされることとなる。局所化 (Lokalisierung) はその意味では (視覚における知覚作用、想起作用等々と同様に) 一つの作用であり、その作用によって構成された内容が、局所付けられた内容といえる。この構成され統握された内容としての局所付けけであるが、二方向から誤解を受けやすい事象といえる。ひとつは物の延長であり、もう一つは接触において生じる感覚内容とは異なる事象であるので注意を要する。

局所付けは「拡がり」 (Ausbreitung) (H.V. 7) をもつこととなるが、フッサールはこの拡がりとは物の延長とは原理的本質的に別ものであることを明示している (H.IV. 149)。物の延長は質料的な物の延長であり、実在的な時間・空間 (形式) をもつ自然の本質である。それに対して拡がりのほうは、たとえば身体固有の手の表面や内部にみられる拡がりであり、身体固有の空間を構成しているといえる。(もちろん、身体が物の一つとして構成された場合には、拡がりとは延長とは合致するが、しかし本稿の議論の運びからするなら、両者の合致はなお確認されていないし、またたとえ合致したとしても、それは別の領域に属している内容の合致であり、同一ではない。この合致が確認できるのは、右手が左手に触るといふ身体の自己接触現象によって、右手が (左手によって) 物として構成されると共に、(右手がある物に触ることによる) 身体として構成されることによる。) 局所化された内容に関しては、さらにもうひとつ感覚とが対

比されなければならない。この場合、感覚態と呼ばれる概念が身体固有の事象のなかで議論される。

フッサールは「拡がりのなかで局所付けの可能性の根本条件が伏在していること、そして、それと共に間接的もしくは直接的に拡がりをもって見られるあらゆる感覚類は局所化されて知覚されうるはず」 (H.V. 7) と述べているように、感覚は局所化されることによって知覚されるもの (つまり知覚対象としてのノエマ) となり、それが拡がりをもつ身体と位置づけられる。

またフッサールは触覚感覚が生じる身体に関する「[出来事] (Vorkommnis) を特に「感覚態」 (Empfindnis) と規定して、その特殊性を際立たせようとした (H.IV. 146)。しかしこの感覚態概念であるが、フッサール自身に揺らぎもしくは曖昧さを抱えていると思われる。

たとえば局所付けと感覚態に関しては、「身体は身体として統握されれば、触覚の感覚態という局所付けの層」 (H.V. 10) をもつといわれるように感覚態は触覚において局所付けられた内容であり、統握された身体 (の一部) をさすこととなる。また「感覚態の局所化」という表現から、感覚自身とその局所付けというように区分し解釈すべきではない。フッサール自身が、感覚態を、つねに局所づけられた内容として述べている。さらに「触覚感覚態は質料的な物である手の状態ではない。そうではなく手そのものである」 (H.IV. 150) と規定しているように、感覚態自身は実在物であるが、質料的物ではなく、実在として

の身体であることを明示している。それゆえ、感覚態は単なる感覚群ではなく、局所付けられた内容を身体にもつ、あるいは局所付けられた内容そのものとして規定され、あくまでも身体として構成された層であると述べている。以上からすると、局所付けは感覚内容ではなく、あくまでも身体として構成された内容（すなわちノエマ）を意味することとなる。

また実在としての身体を扱う身体論としてそれは狭義の自然科学であり、「身体感覚態に関する教説」として感覚器官や神経組織の生理学を想定している。感覚態は、実在の身体構成において議論される場合には、感覚ではなく、あくまでも構成された内容をさしている。

以上により、身体固有の構成が局所付けと感覚態のもとに論議されたこととなる。しかし感覚態に関しては、フッサールはある揺らぎを抱えていると受けとることができるのでその点にも触れておこう¹²⁾。

まず感覚態はあくまでも触覚の感覚であるとする理解がある。これはフッサール自身、そのように規定しているところがあり、たとえば感覚態を「触っている指の表面で常に変動しつつ伏在する諸感覚」(H.V. 150)と述べており、明らかに構成された指に感じられている感覚と位置づけている。また「我々は、(先に示された局所付けを身体表面もしくは身体内部にもつ感覚群)の際立たせのために感覚態に関して述べるのである」(H.V. 118)と言っているように、感覚態をあくまでも感覚のひとつ、身体にかかわる感覚のひとつとして規定している。

その場合、身体接触によって感覚が生じ、感覚が局所付けされる、と解釈される。これは、局所付けはある領野の開示として受け取られるが、しかし、先に述べたようにイデーン期において局所付けは、作用のひとつを意味しており、この解釈によるさらなる議論の深まりは見いだせないと思われる(領野の開示とその構造化の問題はいわゆる後期にフッサールが課題とした問題群であり、このイデーン期においては萌芽が読み取れる段階といえよう)。

あるいは感覚態を、構成された身体の表面あるいは内部での感覚とする解釈も成立する。しかしこの場合、肝心の身体の(表面あるいは内部の)構成そのものが、示されないままに終わってしまう。

さらには層という表現、その多層性を二重に解釈することも可能である。この場合、層性を多重性とし、感覚内容からノエマ、対象性までを含むものとして捉えることとなる。しかしこの解釈はいわば、フッサール後期の受動的総合を先取りすることとなる。

またフッサールは感覚態を身体固有の「出来事」(H.V. 146, H.V. 119)と定義している。そのことから、感覚態を、感覚およびその感覚を通して構成される局所付けされた内容の双方を含んだ広義の内容としても受け取ることができる。しかしながら、この解釈は、事象の曖昧さと分析の困難さからすると逆に混乱を引き起こす可能性がある。

感覚態自身は、フッサール自身の表現の曖昧さから、感覚と

も構成された内容ともいえる文脈に登場している。しかし、(物とは異なる本質をもつ) 身体固有の構成に関わる時の分析において局所付けとともに記述されるときには、身体固有の構成された内容(いわゆるノエマ)として位置づけられよう。

(b) 身体の自己接触による構成

フッサールは、『イデーⅢ』および『イデーⅡ』において、身体の一部が身体に触れるといういわゆる自己接触現象からも身体構成の分析を進めている。ここでは『イデーⅡ』の分析を取り上げ、その意義とその限界を見いだすこととする。

『イデーⅡ』の「第三六節 局所化された諸感覚の担い手としての身体構成」でフッサールは、身体の自己接触現象を取り上げている。

議論の展開として、まずそれ以前になされた議論で、空間的物を経験する場合には、常にそれを経験する主観の知覚器官としての身体が関与していることが確認される(HIV, 14)。そして次にこの身体の構成を主題とする訳である。その場合に、いままでは空間的な物を知覚する際に身体は物に触っていたが、今度は物のひとつとして(自己) 身体をさわり、そこから身体構成を導くという議論の展開をしている(物に触っている身体という事象から身体を論述する方法をとっていないことに注意されたい)。

まず右手が(いままで触っていた何らかの物の代わりに)左手を触ることとする。この場合、左手は物として構成される。

そして、左手にも触感覚を感じていて、それは左手に局所化されている。そして左手が物として構成されているといっても、左手が体験している感覚自身は、左手自身の物構成にはならなかつた。また左手が文字通り単なる物にしかすぎなかつたら、この左手に感じている感覚は生じないこととなる。ここから、左手が体験している感覚がもととなって、「その物(筆者注:すなわち左手)が身体となつて感覚する」(HIV, 15)。この議論の運びは、物としての身体が、物以上のもの、つまり身体として固有の感覚を保持していることを示しているに過ぎないし、また身体構成の議論をする際に、物としての身体、あるいは物としての身体の「同一性」があらかじめ前提とされているという疑義が生じてくる。

さらには、これでは左手に感覚が生じるということ述べたに過ぎず、身体固有の「構成」にまで踏み込んだ議論となつていないともいえる(身体構成分析にまで至っていないといえる)。構成ということを述べていると考えた場合でも、また物として構成された左手を前提として、その左手に感覚の局所付けが生じていると受け取られかねない。また元々の論述が、(自然主義的態度のもとで)物、動物、心、という階層を念頭に置いていたために、物構成を踏まえて、身体構成へ論述する手順を踏むこととなっており、あたかも身体構成が物構成を前提しているようになってい(あるいはそう受け取られる)といえる。

フッサール自身は、この分析の後に自己接触ではなく、物接

触から、その接触が局所づけられて身体固有の構成が成立することを記述しているが、しかし、物構成を前提とした上で身体構成が成立するのではないのか、という疑問をそのまま抱えることになる。議論の流れからするなら、あくまでも物接触のもとのみ、議論を展開すべきだったとおもわれる。ここでは物としての身体を介さない身体構成が問われるべきであり、そのためにも何らかの物接触においての身体機能とその機能における身体の自己構成が分析されるべきだったといえる（また自己接触現象の特有性を見いだすためにも、この手順は避けられないのではないかと思う）。

第三章 身体構成を巡るアポリア

以上でフッサールは、身体構成に関しては二つの方向から論述を進めていたことが示された。第二の方途においては、実は、現在の階層性そのまま持ち込まれる可能性があり、その点において分析の不十分さが垣間見えることを指摘した。

この問題を引き継ぐ形で、フッサールは『イデーニウムⅢ』の「付論一 第二巻から第三巻への移行」で身体構成に関してあるアポリアを述べているので、この問題に関しても明らかにしておこう。ただしこの付論は、その草稿の一部分がいわば切り取られ『イデーニウムⅡ』の本論の中に流用され埋め込まれており、再構成する必要があるものである。そしてこのアポリアは、それがアポリアであること自身がかなりわかりにくい。

議論としては、身体構成を論議する際に、物としての身体を前提としているのではないかという困惑を述べている。

我々があげた身体の例において、その身体が物としてそこにあることをすでに前提とした。これが物であるのは、我々にとつて経験において身体を可能的に自由に触れたり見たりすることによってでしかない。しかしこのような接触と観察は、身体活動として統握されていて、その場合身体を物として統握することはまたも可能的な諸身体運動を遡って示すこととなり、こうして我々は困惑に陥ってしまひそうになる。（困難さは、物構成的な諸感覚と身体的に局所化されている諸感覚という二重機能をもった諸接触感覚が、物構成的であるだけで局所化されていない諸感覚に対する優位性をどのように理解するかということでもあろう。）（H.V. 121）

ここでは二つの問題が述べられている。ひとつは物としての身体が前提とされていて、そのもとに身体構成がなされているのではないかということ、もうひとつは、この問題との関わりで接触感覚の優位性をどう捉えたらよいか、ということである。この場合二番目の問題が一番目の問題と直結していること自身が不明瞭で、なにゆえフッサールがこの二つを結びつけたのかも考察する必要がある¹³⁾。

最初の問題だが、どちらかといえば、記述の流れから生じた

問題とみなせる。

なるほど、この付論の論述からするなら、身体構成が物としての身体（の同一性）運動を前提としているようにみなされるかもしれない。また本稿の第二章（b）で述べたように、物の世界、身体の世界（さらに心の世界）が階層としてみられた場合には、物としての身体の成立が前提とされているようにみえる。しかし実は、この当惑を述べた後でフッサールは、現在では『イデーⅡ』の第一編第三章第一八節の最初のところはこの草稿が使用されているのだが、二種類の感覚、つまりヒュレーとキネステーゼを導入している。つまりこの付論の論述の運びからすると、先にあげた困惑を述べた後に、二つの感覚を導入して二重の感覚から物構成と身体構成を導いているわけである。物に接触する現象においてフッサールは次のように述べている。

それらの感覚（筆者注：接触感覚や温度感覚、味覚感覚など）は物構成的と同時に身体構成的に機能しており、そして後者の観点（身体構成的）においては、身体を物として構成し、そして身体を局所付けの領野として、つまり諸感覚態の担い手として構成している（H.V.123）^三。

身体の物接触において、接触感覚とキネステーゼという二重の感覚から身体構成と物構成が共に成立している。そこでは実在としての身体が物を前提としているのではないかというアポ

リアは解消される。この分析からは、物の優位性を述べる必要はなく、またアポリアは事象分析に由来しないことがわかる。またこのアポリアの解消には身体構成（とともに物構成）が成立する触覚感覚において理解される。視覚感覚においては、身体が構成しないのでこの問題の解決には寄与しない。先のアポリアと触覚感覚の優位性とはその点でつながっているわけである。アポリア自身は、付論のなかの叙述のなかで生じてきたものであり、また自然主義的態度における質料的自然の前提に由来するものといえる。

しかし『イデーⅡ』の議論の展開では、身体の導入において、最初からヒュレーとキネステーゼの相互連関から物構成と身体構成を導き出しているわけである（取り上げた『イデーⅢ』付論一とは議論の展開が逆になっている）。それゆえ『イデーⅡ』から『イデーⅢ』、さらにはその付論と読んだ読者からすると、それがなにゆえ困惑（アポリア）を招くのが逆にわかりにくくなっている。

第四章 心の構成（と身体）

最後に実在としての心がいかに構成されるかを辿つてみよう。

心自身は「絶対に分割不可能な統一体」（H.V.133）である。それは意識流の唯一性とそれを分割することが不可能であることによる。

ただし心は重層構造を保持しており、状況に対する心の依存関係から心的実在は三つに区分することが可能である (H.IV.136)。ひとつは心理物理的側面(生理心理的側面)、そして心理固有の側面、さらには間主観的な依存関係の三つである。本稿に関わるのはそのうちの始めの二つである。

最初の心理物理的な側面は、身体を基盤として心的実在が構成される。人間という実在に関しては、フッサールは次の三層を見ている (H.V.14)。第一層は質料的な身体という物を自身のなかに含んでおり、その実在性は、第二の感覚態の層により身体となり、さらには第三の感覚態の層と連累する心の層によって完全な人間となる。この順序は階層となっていて、後の層はより以前の層を自身の中に含んでいる。この構想はむしろ自然主義的態度の下での論議の下でなされている。そして第二と第三の層に関していえば、やはり感覚自身は共通のものとして位置づけられ、その同じ感覚によって両者が構成される。まず第二段階において、感覚は身体の「感受性」(Empfindsamkeit)の表れである。感受性自身は「身体に帰属する感受性」という実在的な固有特性の層」(H.V.9)と言われるように、あくまでもそれ自身が実在的な層であり、実在としての身体の能力を示している。これは感覚をどのように受け取るのか、あるいはいかに受け取るのかは身体の感受性に依存し、また感受性が身体の能力を示すことになるからである。感受性自身は、身体の一特性として位置づけられ、構成された内容となる (H.IV.155)。

それに対して感覚は第三段階において知覚統握における素材的基盤となる。ここでは動機付けるものというキネステゼ的感覚と動機づけられたものという機能である呈示する感覚の二つの契機が関わり合っている。そしてそれぞれが心と物を構成することとなる。こうして三段階に段階づけられる層が構成されることとなり、特に心理物理的側面が示されたこととなる。

しかしさらに「統握は、それ自身で、自身の統握を経験し」それを「心的諸状態」として経験する (H.V.15)とも述べられる。ここではフッサールは自然主義的態度の分析から離れ、心の固有性へと眼差しを向け変えていると考えられる (vgl. H.IV.136)。この場合、感覚を、身体から感受している感覚として捉える(心理物理的側面)のではなく、感覚を自身の意識のなかで受容し、その意識活動を把握し捉えることとなる(心理固有の側面、いわゆる性格特性)。

この心の状態は、統握の働きをとりあえず考察から除外するなら、心のもつ連合であるとか習慣、記憶といった傾向性を意味する。そこでは「心は、外部との依存関係ではなく心自身の影響によって心自身から生じたものとして心の中に表示される実在的な諸性質」(H.IV.136)をもっている。

さらにこの心の状態は意識の体験流の統一のなかで語られる。「心の統一である心理学的自我」については「心の諸状態は、・・・超越的な統一体ではなく、内在的な体験流に属している」(H.IV.131)。そして、その体験流は、「内在的に知覚可能な諸体験」である。つまり心は、意識の流れにおいて存在

するので、物のように分割もできず、ある型において規定することもできない。体験流は流れることによつて変化するが、しかしどの体験も時間的な配置を後に残し、心に関して新たなものを生み出す (H.IV. 133)。このような連関が成立しているという意味において心は統一性をもっている。しかも超越的な存在はすべてこの内在的な体験流の中で表示されることになる。ここで、先に規定した自然主義的態度における基盤としての実在する自然という議論展開がいわば逆転することとなり、体験流を源泉として事象が分析されることが示される。

ここでは自然主義的態度では捉えることのできない、心固有の領域が示されていて、「心自身は、自然ではなく、自然の諸特性を獲得するわけではない」(H.IV. 345)と規定される。

心が心的実在であるといわれるのは、心理物理的な依存関係 (H.IV. 138) の中で、身体と連累していて、そこに因果関係が見いだせるためである。そしていままでの議論を総括して「質料的な自然と対比してきたものは、心ではなく、身体と心の具体的な統一」(H.IV. 139)と述べて、一方では心理物理的な心身関係を示してはいる。しかしそれにもかかわらずここでは、フッサールは、心が、自然主義的態度においては十分に説明できないこと、逆に自然主義的態度による質料的自然を出発点とし基盤とした分析を逆転させる視点も示している。またいわゆる心身問題がどのように発生するのかをフッサールなりの仕方ですべて示していると思う。心身問題は自然主義的態度のもとで解消を図るとするならば、心のある一分類に縮小する限りで、つまり

心的実在として規定する限りで、その見通しを語る事ができるといえよう。

結

本稿は、身体が物に接触しているという事象から、その感覚与件が三重に機能して、物構成、身体構成、心の構成が成立すること、さらにその構成の中で、身体と心とが互いに連累していることを示した(つまり身体と心とが構成され、さらにその上でその後に連関しあうという考察は事後的なものであることが明らかにされた)。

またフッサールは身体構成においては実は、自然、動物という領域のもとで、身体が自己身体に触っている事象をいわばもう一つの系統で分析しており、本稿はそれが擬似的なアポリアを引き起こしていることを述べた。またさらにそこから身体の自己接触現象はこの前提の下に議論されているため、議論が錯綜することとなり、自己接触現象の固有性については見いだすことができない結果に陥っていることも示唆した。

自然主義的態度における心の領域の分析は、その分析の中で自然としての心としては十分に捉えきれない事象が垣間見られ、その制約が示されることとなった。また心理物理的な、いわゆる心身問題も自然主義的態度の中で心の一部分に焦点をあてたために生じたものであり、自然主義的態度に起因する側面があることが明らかにされたと思う。

なお自己接触現象の固有性については、自然主義的態度の制約とは関わりなく、身体固有の現象として、その固有性の源泉を新たに議論しなければならないが、それは論を改めてなされる必要がある。

注

フッサール著作集からの引用は以下の巻数をローマ数字でページ数をアラビア数字で示した。

<Husserliana>

Edmund Husserls Gesammelte Werke, hrsg. in Gemeinschaft mit dem Husserl-Archiv an der Universität Köln vom Husserl-Archiv Löwen unter Leitung von H. L. van Breda und S. Jisseling, den Haag, Matus Nijhoff, 1950ff.

Bd III Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie. Erstes Buch. Allgemeine Einführung in der reine Phänomenologie, hrsg. v. K. Schuhmann, 1976. (『イデーンⅠ』(二二分冊) 渡辺二郎訳、みすず書房、一九七九・一九八四年)

Bd IV Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie. Zweites Buch. Phänomenologische Untersuchungen zu Konstitution, hrsg. v. M. Biemel, 1952. (『イデーンⅡ』(二二分冊) 立松弘孝他訳、みすず書房、二〇〇一・二〇〇九年)

Bd V Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenolo-

gischen Philosophie. Drittes Buch. Die Phänomenologie und die Fundamente der Wissenschaften, hrsg. v. M. Biemel, 1952. (『イデーンⅢ』 渡辺・千田訳、みすず書房、二〇一〇年)

(1)

Lokalisation & lokalisieren について、渡辺・千田訳『イデーンⅢ』では意識して「感覚作用の局所限定」という訳語をあてているが、この訳語はその作用面(ノエシス)を明確にする訳となっている。

(2)

感覚態に関する代表的な訳・解釈をあげておく。
木田元他編『現象学事典』弘文社、一九九四年、七二頁では、Emphindnis は「感覚態」と訳され、感覚態は「身体に局在される感覚」と定義されること、「感覚が対象構成の契機となるに先立って、ある身体的状態の感覚として、まさに自己意識を成り立たせる始原的契機」であると述べている(この項目の執筆者は魚住洋一)。この引用から明らかのように、魚住は感覚態を「感覚の一つ」、しかも身体特有の状態を示す感覚であり、さらには自己意識が成立するための一契機であるとしている。

立松弘孝他訳『イデーンⅡ』みすず書房、二〇〇一年(Ⅱ一)、『二〇〇九年(Ⅱ一Ⅱ)』では、「再帰的感覚」(Ⅱ一Ⅰ、一七二頁)という訳語があてられている。これはこの概念が、「身体固有の出来事」を呈示しているからと解釈できる。なお触覚感覚それ自身がそれ自身で「再帰性」を

持っているわけではなく、この感覚が二重に機能していて、この感覚を介して身体が構成され、そこに帰着性が見いだされることから、この解釈は、感覚と感覚を介して構成された内容の双方を含有していることを述べているといえる。(同様の解釈として、ペトリロは、感覚態を特殊な身体的出来事であるとし、志向的意識のなかで実的なものを含有している志向的体験と規定している。Pettilo, N., Die

inmanente Selbstüberschreitung der Egoologie in der Phänomenologie Edmund Husserls, Ergon Verlag, S.94f, 2009.)

渡辺二郎他訳『イデー・III』、みすず書房、二〇一〇年、一一頁では「感受状態」と訳され、訳注(一八四頁)では「あるならんかの感覚をもち、感受している心の性質」と規定している。これはフッサールの述べた「感覚態はすべて私の心に属し」(H.IV, 150)によると推察される。この場合には、感覚態はすでに構成された実在の心に帰属していることから、あくまでも構成内容を意味すると捉えられる。この問題に関しては細川亮一が主題として取り上げ、身体の自己接触によってこのアポリアが解消されると見なしている。細川亮一「フッサール現象学における身体」、立松弘孝編『フッサール現象学』勁草書房、一九八六年、二〇二頁。

(4) フッサールはここでは物接触において、身体自身の側に物としての構成と身体自身の構成の両側面が生じると記述している。これは他の物接触現象の分析においては見られな

い記述であるが、これ以上の事象的分析をフッサールはなしていない。

本論文は科学研究費補助金(基盤研究C)の研究成果の一部である。

(すぎき・こうぶん 石川工業高等専門学校・一般教育科)